
魔法の国のティカ

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の国のティカ

【Nコード】

N2177BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

佐藤千花（16）はどこにでもいる普通の女子高生……のはずが、ある日突然、自転車ごと魔法大国ガルディアに異世界召喚される。たまたま膨大な魔力を宿していた振り回され体質の主人公が魔術師の弟子になって、なぜか城でお姫様生活をしたり、自転車で異世界観光したり、ツンデレ師匠の束縛紛いの監視の下、王子や騎士達に囲まれてうるたえたりする、ちょっと非日常な異世界生活を綴ったファンタジー・ラブコメディ。

00 わたしのハゲ抹茶

「あー、アイス食べたい。アイスアイスアイス」
残暑厳しい夏休み。

佐藤千花は無性に高級アイスが食べたくなって連呼した。

今外に出たら暑いだろうなー。あー、でもアイス食べたい。

少しばかり迷った後、結局千花は近くのコンビニまでアイスを買
いに行くことにした。

「千花ー、どこ行くのー？」

二階の部屋から階段を降りていくと、リビングにいる母親から声
をかけられた。

「ちょっとコンビニにアイス買いに行ってくる」

「それなら、ついでにいちごのかき氷買ってきてよ」

「うん、分かった。行ってくるね」

千花は頷くと玄関を出る。

「……………あつっ……………蝉うるさー……………」

文句を言いつつ、軒下に置いてある自転車を取りに行く。

照りつける太陽の下、自転車を漕いで三分ほどのコンビニに着く
と、千花は目指す高級アイスとかき氷を手に入れた。

自転車のかごにコンビニのビニール袋を放り込むと、千花はアイ
スが溶けてはかなわないと速攻で自転車を走らせる。

すると、目の前にきらきら光るものが見えてきた。

やだ、ガラス？ 避けないとパンクしちゃう。

千花はその場所を避けようとハンドルを斜めに向けようとしたが、
なぜかそれが出来ずに自転車は直進する。

「ええ？」

今度はブレーキを思い切り握った。……がそれも効かずに自転車は更に加速した。

「うええ！？」

思わず千花の口から素っ頓狂な声が漏れる。

なにこれ、チャリ壊れた！？

自転車はきらきら光るものに当たるといきなり停止した。

「おおおっ！？」

放り出されるかと思って、千花は女子にあるまじき声を上げる。

しかしその衝撃はなく、真下にあるきらきら光るものがいきなり円を描いた。

次の瞬間には光の洪水が来て、千花は思わず叫んだ。

「な、な、なにこれーっ！？」

光の洪水が治まると、千花はまったく見知らぬ場所にいた。それも、どう見ても室内。

千花が呆然としてしていると、目の前の淡い金髪で水色の瞳の男は自転車のかごからコンビニ二袋を取り出した。

緩く波打つ背中の中程まで長髪。顔は超絶美形と言っていると思う。千花が今までお目にかかったことがないような美形だ。けれど、この衣装はなんだろう。まるでファンタジー映画に出てくる人のようだ。

千花がぼーっと見とれていると、超絶美形はおもむろにアイスを食べ始めた。そこでやっと千花ははっと気づく。慌てて自転車のスタンドを立てると男に向かって叫んだ。

「ちよっ、わたしのハゲ抹茶！勝手に食べないでよ！」

「禿マツチヨ？ おかしな名前だな。もう一つあるだろう、それを食べる」

「なんであんたに指図されなきゃいけないのよ、禿ドロボー！」
楽しみにしていたアイスを奪われ、更に上からの男の物言いに千花は頭に血が上る。

「おまえは目がおかしいのか？ 俺は禿げてない。……ああ、頭がおかしいのか気の毒にな」

「なんですってえええっ」

あまりの言われように、千花は思わずきいっと叫びたくなる。

「いらぬのならそちらも俺が貰うが」

「！ 食べる、食べるわよっ」

千花は慌てて男からコンビニ袋を奪い返した。そして溶けかかったいちごのかき氷をかきこむ。

「う」

頭にきーんと衝撃が来て、千花は思わず呻く。

「やはり馬鹿だな」

心底馬鹿にしたような男の表情に千花はむかむかした。

「うるさいよ！」

一声叫ぶと千花は目の前のかき氷にとりあえず集中することにした。

かくして、室内には不似合いなママチャリを挟んで、見た目フアンタジーな男と千花がアイスとかき氷を食べているというおかしな構図が出来上がったのである。

01 どうやら異世界らしい

千花がかき氷を食べていると、四十代ほどの男性が室内に現れた。なにか突然出てきたような気がするのだが、千花の気のせいだろうか。

「カイル、召喚魔法をやたらと使うなと言ったはずだが。またおまえは使ったのか」

千花のアイスを奪った男に文句を言っているようだが、なんとなくべつているのか千花には理解できない。

「……誰？」

短い茶髪に青い瞳。また外人だ。この人もファンタジー映画のよくな格好をしている。

いや、それ以前にここはどこなんだ。悠長にかき氷なんぞ食べている場合じゃなかった。

千花の疑問には二人は答えず、勝手に会話が続いていく。

「……師匠は弟子を取れと言った。だから、召喚魔法で魔力の強い者を喚び出した」

「はあ？ 召喚魔法ってなによ？ ファンタジー小説とかゲームじゃあるまいし」

いくら目の前の男の格好がファンタジーでも、言ってることまでそんなことってある？ ……もしかして危ない人？

そんなことを考えて、千花が目の前の男から更に距離を取る。

「……なにを言ってるのか分からんな。ひょっとして異世界の者が？」

「そうだ。ここより科学が発達している世界の者だ」

千花の質問を無視して目の前の男と壮年の男の会話が進む。

「……おまえ、なんてことをしてくれただ。異世界の者を召喚しただと。今すぐ帰すんだ」

「そういうわけにはいかない。この娘には、俺の弟子になってもら

わなければ」

「弟子ってなによ？　なんでわたしがあんたの弟子にならなきゃいけないの？」

弟子って、なにかの伝統芸かなにかだろうか？

なににせよ、アイスを奪われた恨みは深い。こんな男の弟子なんて、千花にはまっぴらごめんだった。

「後で説明する。おまえは少し黙ってる」

「なっ」

そっけなく男に一蹴されて、千花は気色ばむ。

『この娘にも家族や友人はいるだろう。それをこちらの勝手な事情で引き離す訳にはいかないだろう』

「しかし、たぐいまれな魔力の持ち主であることには変わりはない。もう決めたんだ。俺はこの娘を弟子にするぞ」

「魔力ってなによ？　勝手に人を弟子に認定しないでよ」

「黙れ」

男が千花に手のひらを向けると、なぜか彼女は話せなくなった。

な、な、なによこれーっ!?

千花は驚愕に口をパクパクさせる。

『……仕方ないな。おまえが言い出したらどんなに反対しても無駄だとは分かっている。だが、こんな大きな娘を弟子にするのはいろいろ問題があるぞ』

「とりあえず、この娘の部屋は用意する。それでいいだろう？」

『分かった、それでいい。……ああ、その娘の難民登録をするのを忘れるな』

「ああ、分かった」

よく分からないが話は付いたようだ。

それならわたしにも分かるように話して欲しいものだ。そう思っ
て、千花は二人をじつと見る。

『言語疎通の指輪を渡した方が良さそうだな』

壮年の男が腕を掲げると、その手のひらに指輪が出現する。

なっ、なにあれ？ なにかの手品？

壮年の男が千花に近寄って左手を取ろうとしたので、慌てて彼女は後ろに後ずさった。

しかし、男がなにかを呟いたとたん、体が動かなくなって千花は焦る。

な、な、なんだこれー！？

男は動けない千花の手を取ると、左手の中指に指輪をはめた。

「これで我々の言葉が分かるだろう。……カイル、この少女の沈黙魔法を解け」

あれっ？ 話分かる！

千花が驚いていると、カイルと呼ばれた青年が彼女に向かって短くなにかを呟く。

「……ちよつと、ここはどこなのよーっ！？」

話せるようになったとたん、カイルに千花は叫んだ。

「……もう少し、黙らせておいた方がよかつたか？」

「そう言うわけにもいかないだろう。少なくとも我々には説明責任がある」

うんざりした口調のカイルに壮年の男がカイルの肩に腕を乗せて苦笑する。

「……ここは、オルデリード大陸、ガルディア王国。首都のルディアだ」

「は？ 聞いたことない名前なんだけど」

「それはそうだろうな。おまえからしたらここは異世界だ」

いせかい。異世界。異世界！？

「あはははは、冗談きつついわ」

千花は笑い飛ばしたが、目の前の二人はいたって真面目な表情だ。……すぐには信じられないのも仕方ないだろうな

壮年の男がなにごとかを呟くと、景色が一変した。煉瓦色の屋根が遙か下に見える。

「ちよ、うそっ！ 足、体浮いてるっ」

「ここが中央ルディア市内だ。……おまえ、うるさいぞ」

カイルが眉を顰めるが、地に足が着いていない状態というのは不安なものだ。

「し、仕方ないでしょ。この状態で静かに出来るかつての！」

「まあ、そうかもしれないな。だが、落ちないから大丈夫だ」

壮年の男が苦笑すると、一点を指さした。

そこには立派な白い城。その城を中心としてヨーロッパのような古い町並みが円を描くように取り囲んでいた。

「なにあれ、もしかしてお城？　ここはヨーロッパかなにか？」

「もしかしなくても城だが、おまえの言うようなヨーロッパというところではない」

カイルが千花の疑問を軽く否定する。

「それじゃ、新しいテーマパークかなにか出来たの？」

それにしてもすごい規模だ。日本一大きいと思われる某テーマパークを軽く上回る。

「あれはガルディア城だ。この国の中心。魔法大国の顔でもある」

壮年の男が真面目に説明してくれるが、どうしても違和感が残る。

「さつきから魔法、魔法って……、おかしいんじゃないの、あなた達」

「じゃあ、今浮いているのはなんだ？　さつき室内から移動してきたのは？」

「えー……、手品？」

千花が苦し紛れにそう言うと二人は頭を抱えた。

「ここまで見せて理解できないとはおまえは馬鹿か？」

カイルが心底呆れたように言った。

「なっ、失礼なこと言わないでよね！」

「待て、二人ともとりあえず戻るとしようか。これでは埒があかない」

「……ああ、そうする」

カイルが手を振ると、さつきの場所に戻ってきた。

「あ、あれ？」

「これが移動魔法だ。いい加減理解しろ」

千花が首を傾げているとカイルが冷たく言い放つ。

「この娘の場合、理解したくないというのが正解のようだがな」

「……ならば、理解させてやるまでだ。おいおまえ、名はなんという」

偉そうに言われて、千花はカチンとくる。

「人に名を尋ねるのなら、まず自分から名乗ったらどうよ？」

「……なんだと。まあ、いい。俺はカイル。カイル・イノーセ

ン。魔術師だ。こちらにいるのは俺の師匠でシモン・ガーランドだ」

魔術師？ やっぱり鳩とか出すあれじゃないの？

「わたしは千花。佐藤千花だよ。そちら風に言えば、千花・佐藤かな」

「テイカ・サトー？」

「テイカじゃなくて、千花！ ちゃんと発音してよね」

「……悪いが君の名前は、この大陸の人間には発音しにくい。良ければテイカと呼ばせてもらっていいかな？」

カイルに比べれば大分人当たりのいいシモンに言われて、千花は不承不承頷く。

なにか納得できないが、発音できないのならば仕方ない。

「まあ、それならしょうがないけど」

「弟子のくせに偉そうだな、テイカ」

「あんたに言われたくないし！ 第一弟子つてなんのことよ」

「おまえには俺の話は聞こえていたと思ったが。おまえの頭はスポンジか？」

「……そこまであんたに言われる筋合いはないんだけど？」

ビキビキと千花の周囲の空気が凍る中、シモンが慌てて言い繕った。

「カイル、おまえは口が悪すぎるぞ。テイカ、この男は言葉は悪いが腕だけは超一流だ。弟子としてそれだけは安心していい」

「とりあえず、おまえが俺の弟子になることはもう決定事項だ。おまえは家に自力では帰れないしな」

「……なんですって？」

到底看過できないことを言われて、千花は挑戦的にカイルを見上げた。

「召喚魔法でおまえをこの世界から喚び寄せた。どうしても帰りたいたら召喚魔法を習得してから帰れ。俺ですら習得に何年もかかった高等魔法だかな」

「ちよつと、勝手なこと言わないでよ！ わたしはあんたの弟子になるなんて一言も言っていないわよ！ わたしは的意思是どつなつちやうわけ！？」

「はつきり言えない」

きつぱりとカイルが言うのと、シモンが肩を竦めた。

「……こんな男だから、この際、諦めてくれ」

「第一、師匠が城に仕官できなければ弟子を取れと言わなければこんな面倒なことせずにすんだんだ」

「俺のせいかな？ まさか召喚魔法で弟子を喚びだすなんて普通思わんだろう」

シモンが少し情けない顔になる。

千花は今までの二人の話を思い返しつつ、なんとか話を理解しようと努めた。

「……えーと、話をまとめると、ここは異世界でカイルがわたしを召喚魔法とやらで喚びだしたわけね？ それで、その理由は弟子を取ることだったと」

「ああ、そうだ」

千花の確認に、カイルがあっさり頷く。

「それで、わたしが召喚魔法を習得しないことには家には帰れないってことよね？」

「そついうことになるな。まあ、諦めろ」

諦めると言われて、そう簡単に諦められるかっての！

「そうなんだー。ふふふ」

千花はやたらとふふふと笑うと、不気味がるカイルにおもむろに近寄る。そして彼に往復ビンタを思い切りお見舞いした。

02 結局、異世界生活

「……なにをする!」

カイルは打たれた頬を押さえて一瞬呆気に取られた後、千花に怒鳴った。

「それはこっちの台詞よ。あんたのやったことは犯罪じゃないの。誘拐よ、誘拐」

千花が腰に手を当てる声を大にして主張する。

「まあ、そういうことになるな」

シモンが鷹揚に頷く。

「あんたを警察……があるかは知らないけど、警備の人に突き出してやるんだから!」

「出来るものならやってみろ。言っておくが俺は城に顔が利くぞ。多少のことなら揉み消せる。それに、どこから見ても異国の者のたわごとを信じる人間がどこにいるんだ」

この悪党!

ギリギリと歯ぎしりしたい思いで、千花はカイルを睨みつける。

「そんなことより、素直に俺の弟子になれば生活の保障はされるし、いつかは帰れるぞ」

「生活の保障なんて当たり前でしょ! そっちが喚びだしたんだから!」

「弟子にならない場合はおまえの生活の保障は一切ないからそのつもりでいろ」

「ちよつと!」

ふざけんな! どれだけ自分勝手なんだ。

憤った千花はカイルよりも立場的に偉いはずのシモンに助けを求め。

「じゃあ、シモンさんどうにかしてください!」

「すまない、それはちよつと出来かねる」

「な、なんでですか？」

「こいつは俺の弟子だが、実力は俺をとうに上回ってるんだ。だから、君を保護した場合、俺がこいつにどうにかされる可能性がある」
「おおい、こいつには師匠を敬う気持ちはないのか！」

師匠を師匠とも思っていないカイルに思わず千花が頭を抱える。

「でも、シモンさんから仕官できないなら弟子を取れって言われたっつて」

「それは、第二王子のご命令だからだ。俺だけの命令ならば、こいつは聞かない」

「……」

命令を聞くのは、王族だけとかどんだけ俺様なんだ。……けど、シモンさんもちよっと情けなくない？

「あ、じゃあ、その第二王子様とやらに、わたしを帰すように掛け合ってください」

「そ、それは、少々無理だと思うが……」

ちえつ、やっぱり無理か。

千花ががっかりしていると、カイルが更に言ってきた。

「俺の弟子になるならば、出来るだけ早く帰せるように尽力してやる。生活面も待遇を良くするぞ」

「……どんなにわたしが帰りたいつて言っても、帰してくれないんだよね？」

「ああ、おまえがこれほどの魔力の持ち主でないならすぐに帰していたが、俺を上回るほどの魔力の持ち主だからな。これなら第二王子も文句は言うまい」

……その第二王子って人もまさか召喚してまで弟子を取ろうとするとは思わないと思うよ。

「うっつ〜」

千花は頭を抱えて唸る。

ああ、どうしよう。

ムカつくけど、ここはこいつの話に乗るしかないのか。乗らない

場合は、野垂れ死にコースっぽいしなあ……。こんな訳の分からないことで野垂れ死には嫌だ、うん。

千花は頷くと、カイルに聞く。

「……敬語は使わなくちゃ駄目？」

「まあ、なくてもかまわない。俺も師匠に使ってないしな。なんならカイルと呼び捨てにしてもいい」

「……ええ？」

俺様なのに、カイルと呼び捨てにするのはOKなのか？

千花がまじまじとカイルを見返すと、なぜか彼は頬を染めてそっぽを向いた。

「それでどうなんだ。俺の弟子になるのか、ならないのか？」

「うう、しょうがない、弟子になるよ。……本当にちゃんと帰る方法教えてくれるんでしょうね？」

「しかるべき時が来たらな。まあ、数年先のことだと思うが」

「数年先なんて困るよ！ それじゃ元の世界に戻った時にわたし死んだことになってるかもしれないじゃない」

あれ、行方不明者の死亡確定って何年だっけ。千花は叫びながらもそんな悠長なことを考えていた。

「それはおまえ次第だ。せいぜい頑張ることだな」

「言われなくても頑張るよ」

死亡確定だけは嫌だ。なんとしてもそれまでには家に帰らないと。千花は拳を握って決意を新たに頷くと、カイルに言った。

「じゃあ、嫌だけど、ここにお世話になることにする。すつごく嫌だけど」

しつかりと嫌だけどころを千花が強調すると、カイルは顔をしかめた。

「おまえの部屋はここだ」

カイルに案内された二階にある部屋は、元の世界の千花の部屋よりも三倍は広がった。

「わあ、可愛い部屋ー」

その部屋の壁には爽やかなグリーン系の壁紙の上に同系色のポーター壁紙、またその上に控えめに小花を散らした壁紙が貼られていた。

備え付けのアンティークな机と椅子。チェストにベッド。確かに待遇はいいようだ。

「なにか必要なものがあるなら女中のメリサに言っといい。すぐに揃えてやる」

「うん、そのメリサさんて人はどこにいるの？」

千花が聞くと、カイルは部屋にチェストの上に置いてあったベルを取った。

「用があるときはこのベルを鳴らせ。これはおまえの部屋専用のベルだからすぐにこの部屋に来る。試しに鳴らしてみろ」

「うん」

素直にベルを鳴らすと、程なくして四十代くらいの髪をひつつめた女性が部屋のドアをノックして現れた。

「お呼びでしょうか」

「ああメリサ、弟子を取ったから紹介する。ティカ・サトー、歳は……いくつだ」

「十六だよ」

「メリサでございます。以後、よろしくお願いいたします」

「あ、はい。よろしく願います」

メリサは千花に頭を下げると、千花も慌てて彼女に下げ返す。

「十六か、せいぜい十四、五歳だと思っていたが幼く見えるな」

カイルが千花の全身をまじまじと観察するが、千花にしてみれば、幼く見られがちな日本人の大体の年齢を当てる方が驚きた。

「顔だけ見れば十二くらいだが、おまえ、体つきだけはいいからな」
いやに長々と見てると思ったら、セクハラかよ！

「……殴つてもいい？」

「殴つてから言うな。さっきの平手といい、凶暴だな、おまえ」
殴られた頭をさすりながらカイルが愚痴る。

「まあ、仲のよろしいことで。師弟と言うより、まるで恋人同士です
すね」

「……そう見えるか？」

「冗談でもやめてください」

まんざらでもなさそうなカイルがちょっと怖い。千花は慌ててメリサに認識を改めてもらった。

「まあ、残念です。カイル様はおもてになるのに恋人はいらっしゃらないので、私たち使用人はやきもきしているのですわ。ティカ様がその気になりましたら、いつでもこのメリサにお申しつけください。精一杯応援させていただきます」

カイル、もてるのか。確かに外見は超絶美形だけど、性格がアレすぎるだろう。

千花は世の中の不条理さを呪いながら、期待に満ちた目で見てくるメリサに全身全霊で否定した。

「……いや、そんな気はまったくありませんからっ！」

「……そうですか。本当に残念ですわ。……それはそうと、ティカ様お召し替えをなされませんか？ そのお洋服はこの気候には少し涼しすぎるかもしれないので」

「確かにちよつと寒いかも」

ぴつたりした半袖Tシャツにふくらはぎ上までのパンツにサンダルという格好なのが、先程まで汗をかいていたせいもあり、かなり肌寒い。

「それに肌や体の線を少々露出させすぎですわ。カイル様には目の毒です」

「いや、むしろ目の保養だが」

「……おまえは黙ってる！ と千花は無言を言わせない笑顔でカイルを黙らせると、メリサに向き直った。

「はい、着替えます。あの、汗をかいてたので、出来ればお風呂に入りたんですけど、いいですか？」

「はい、すぐにご用意できます。こちらへどうぞ」

メリサに案内された浴室はゆったり出来る浴槽やシャワーもあり、使い方は日本にあるものとそう変わらなかった。

うっわー、高そうなお風呂ー。まるでホテルみたい。……さすがにライオンの口からお湯は出てはいないけれど。

千花がいかに高級そうな金の蛇口やシャワーヘッドを眩しげに見ていると、メリサに着替え一式とタオルを渡された。

「それでは、ごゆっくり」

「はい、どうもありがとうございます」

千花がメリサを見送っていると、約一名、入浴に大変邪魔な者が残っていた。カイルだ。

「カイル、わたし今からお風呂に入るんだけど。とつと出ていくてくれない？」

なんとか笑顔で千花は言うが、その頬はひきつっていた。

「なんだ、せつかく背中を流してやるうかと思ってたのに」

カイルのその言葉に、千花はぞわつと鳥肌を立てる。

せつかく平和的に言っただけなのに、これは体に直接分かせないと駄目なようだ。

「出てけ　っ！」

千花はカイルをボコボコに殴ると、浴室のドアの鍵をしっかりと閉めてから、異世界での初お風呂を堪能した。

03 ガルディア王宮へ

少し冷えてきていた体もすっかりほかほかになって千花は上機嫌で風呂から上がった。

タオルで体を拭くと、たちまち水分が吸収されていって千花は驚いた。

試しに洗った髪の毛を拭いてみると、こちらもほとんど乾いてしまった。おまけに髪や肌に必要な水分までは吸収しないらしい。

「すごい、ドライヤーいらないや」

異世界の高性能なタオルにすっかり感心しながら千花はメリサから受け取った着替えを広げてみた。

下着は千花の世界とそう変わらないようだがブラはないらしい。

その代わりにキャミが長くなったようなものがあつた。……つまりこれを着るということらしい。ちよつと心細い感じだが、仕方なく千花は下着を身につける。

その上に桃色のドレスのような長いワンピースを着る。太腿までの長さのストッキングを履いた後、ふくらはぎまでの編み上げブーツを履く。

「うわあ、馬子にも衣装かもー」

脱衣所の鏡に全身を映して、千花は前や後ろを確認する。この格好だけで何割り増しか自分が可愛くなつたような気がするから不思議だ。

普段あまり女の子らしい装いはしない千花だったが、それでも今の自分の格好にはうきうきした。

「まあ、ティカ様よくお似合いですわ」

ティカが風呂から出るのを待っていたらしいメリサが、千花の姿を見て褒めた。

「あ、どうも。メリサさん、お風呂ありがとうございました」

「いいえ、お入りになりたい時はいつでもお申し付けください。そ

れはそうと、ティカ様がお出になつたら、カイル様が部屋まで来るようにとおっしゃってましたわ」

「分かりました」

メリサに案内されてカイルの部屋に入った千花は、シモンがいるのを見て、そういえばいたんだっけと彼に失礼なことを思った。

「ああ、とてもよく似合っている。これならこのまま王宮に向かつて問題ないか」

「お、王宮ですか？」

いきなり大仰な話題になつたので、千花はびっくりした。

「第二王子に俺が弟子を取つたことを報告しなければならぬからな」

こともなげに言うカイルに千花は反論する。

「で、でも、わたし、王子様に会うのに必要な礼儀作法なんて全然知らないよ！？ そんなんで大丈夫なの？」

それどころか、敬語自体できるかどうかも怪しいくらいだ。

「その点は全く気にしない人物だから大丈夫だ」

「……そうなの？」

「ああ」

第二王子様とやらはその身分によらず、随分気さくな人物らしい。そう心配することでもないと理解した千花は思わずほっと息をついた。

しかし、王子様に会うなんて大事なのに、簡単に会うと言うなんて、この二人は結構な重要人物なのかもしれない。

「それでは行くか」

カイルはちよつとそこまで、のような感じで言うと、三人は簡単に城の前まで移動した。

目の前にそびえる白い美麗な城に、千花が思わず口をあんぐり開けて見とれていると、カイルが彼女の額を指先で小突いた。痛みはなかったが、いきなりだったので思わず千花は仰け反ってしまう。

「なにすんのよっ」

「馬鹿みたいに口を開けて上を見るな」

「！馬鹿みたいで悪かったわね！」

確かに間抜け面だったろうと想像できるだけに、千花は真っ赤になつて怒鳴つた。

シモンが城の衛兵に目をやると、彼らは頭を下げて城の入り口から退いた。

うわあ、顔パスかあ。

その様子を少々驚いて千花は見ていた。

シモンはカイルにはかなわなくて正直情けないと思つていたが、案外偉い人なのかもしれない。

「……あの、シモンさんでもしかして結構偉い人なんですか？」

恐る恐る千花が上目遣いで聞くと、とんでもない返答がことなげに返つてきた。

「……ああ。一応、この国の魔術師団師団長をしている」

「そ、それつて結構な重要人物つてことですか？」

「まあ、一応な。しかし、俺より強大な魔術師が身近にいるから代替わりさせようとしたんだが……、失敗だったようだな」

シモンは深い溜息を付くと、カイルを見た。

「……誰がそんな面倒な役目に付くか。それに俺は一人で行動している方が性に合っている」

カイルがうんざりとした様子でばつさりと切り捨てる。

「しかしだな……、稀代の魔術師であるキース・ルグランの再来と言われるおまえを放置しておくのは国家の損失だぞ。これは殿下も同じご意見だ」

「……ふん、無駄なことを」

千花には理解できない言葉もあったが、シモンは弟子であるカイルを後継者としていようだ。

そうこうしているうちに一つの立派な部屋の前で二人が立ち止まつたので、千花も慌てて止まった。ひよっとして、ここが第二王子の部屋だろうか。

「エドアルド殿下に目通りを」

第二王子の名はどうやらエドアルドというらしい。

シモンが近衛と思わしき人物に声をかけると、その彼は「少々お待ちください」と言っただけで中に伺いに行った。

「今の人って、近衛の人？」

王族の人を守っているならきつとそうだろうと思って、千花は口にする。

「ああ、近衛騎士だ。おまえは初めて見るか」

カイルと小声で話していると、その近衛騎士が戻ってきた。

「殿下がお会いになるそうです。どうぞ中へお入りください」

促されて中に入ると、華美すぎない上品な部屋の中央に、二十代前半と思われる一人の人物が立っていた。

その人物は印象的な藍色の瞳をしていて、長い見事な金髪を緩く三つ編みにして前に垂らしている。美麗で、かつその上品な所作はまさに王子様というしかなかった。

「……まさか、本当に弟子を見つけるとはね」

王子はカイルを見て呆れたように溜息を付いた。

「ティカ、殿下に挨拶を」

シモンがそう言ってくるが、千花にはどう言っているのか分からなかった。……ので、自然と無難そうな挨拶になる。

「ち、いえ、ティカ・サトー、十六歳です。よろしく願います」

ペコリと千花が頭を下げると、エドアルドが微笑んだ。

「十六歳か、若く見えるね。それに変わった顔立ちだ。どこの国の者だい？」

エドアルドは本当に気さくな性格らしく、得体の知れない千花にも簡単に声をかけてくる。

「え、えーと、日本です」

「ニッポン？」

エドアルドが聞きなれない言葉を聞いたというように、首を傾げる。

「ニッポン、もしくはニホン。またはジャパン」

「ニホン？ ジャパン？ 聞いたことないな」

「それはそうだろうな、この娘は異世界の者だからな」

カイルが王子に対して不遜な口を利くのを千花は他人事ながらも、ついハラハラしながら聞いてしまった。

「カイル、おまえ……。まさか異世界召喚をやったのか」

エドアルドが驚愕に瞳を見開いた。

「異世界探索をしていたら、たまたま俺より魔力の高い娘を見つけたからな。俺の弟子になることを了承させたし、これで文句はないだろう」

「いや、その娘にも家族がいるだろう。すぐ帰してやった方がいいんじゃないか。なんなら、あの話はなかったことにしてもいい」

エドアルドが士官の話を持ち消えにするとまで言ったことに、千花は感動した。

「うわあ、なんていい方なんだろう。わたしを家に帰せって言うてくれたよ。鬼畜なカイルとは大違い。」

「今更だな。俺はこいつに魔術を教えるつもりでいるし、帰す気は全くない。ティカが帰ることがあるすれば、自力で異世界へ戻る時だけだ」

カイルは感激しているティカの気分を地に墜とすようなことを言った。どこまでも勝手な男である。

「しかし、それでは帰るのに何年もかかるぞ」

「……それはティカの努力次第だな。魔力に関してだけは全く問題ないから、それほどかからないかもしれないが」

カイルが肩を竦めると、エドアルドは千花自身に興味が沸いてきたようだった。

「へえ、そんなに魔力があるのなら、ぜひ見てみたいな。確か魔力を計る魔道具があっただろう」

「ああ」

カイルは水晶を手元に召喚させると、それを千花の両手に乗せた。

「えっ？ えっ？」

訳が分からず千花が慌てていると、カイルが説明した。

「魔力を計る魔道具だ。それに念を集中させる」

「念を集中させるって言われても……」

そんなことをやったことのない千花はうろたえてただ周りを見渡す。三人の男達は千花の動向を見守ったままだ。

「やり方が分からないなら、その水晶をじっと見つめているだけでいい」

ああ、それなら大丈夫だ、と千花はほっと息をつく、水晶に意識を集中させた。

その途端、水晶が虹色に輝きだして千花は思わずそれを取り落としそうになって慌てる。

「えええ、なにこれっ!？」

そしてとうとう虹色の輝きがエドアルドの部屋全体を眩しく照らしたかと思うと、いきなり千花の手元の水晶が跡形もなく消えた。

04 異国の姫君

先程までエドアルドの部屋を眩しく照らしていた光は消え去り、元の静寂な室内に戻っていた。

「き、消えちゃった……」

手元の水晶がなぜか消滅してしまったことで、千花はうろたえる。「……測定不能か」

カイルが少し考え込むように顎に手を当てる。

「いや、まさかそんな者がいるのか？ それにあんな光の色は初めて見た」

シモンが驚愕を露わにして千花を見る。それに倣うようにエドアルドも興味深そうに彼女を見た。

「これは、それだけ彼女の才能が桁違いだということでもいいのかい、カイル」

「……まあ、そうだな。俺もまさかここまでの魔力の持ち主だとは思わなかったが」

「ええ？ それ始めから分かってたんじゃないの？」

「大体の魔力は予測することは出来るが、正確な魔力の量が分かるわけではないからな」

「……なんかいい加減……」

ぼそつと千花が漏らした一言に、カイルが冷ややかな視線で「なにか言ったか」と返した。

「別にー。……それはそうと、魔術師としてはわたしの魔力は合格ってこと？」

「いや、合格どころか、今すぐにも魔術師団に入団してもらいたいところだな」

なぜかカイルではなくシモンが目を輝かせて言う。

「はい？ でも、わたしカイルの弟子になるんじゃないんですか？」

「いや、これだけの才能を埋めておくのはもったいない。いずれは

史上初の女性魔術師団長も夢ではないぞ」

「いや、あの……わたしは家に帰りたんですけど。そんな役職に就いたら帰るに帰れないじゃないですか」

割と強引なシモンに千花は内心たじたじになる。

第一、そんな人の上につく役目なんて面倒だ。

「ここに永住したらいいじゃないか。そもそも何年も行方不明になっていた人間が元の世界でうまくやっていけるとはあまり思えないが」

「！ 酷いです！ 第一、シモンさんがカイルに弟子を取れって言ったから、こんな訳の分からない状況になったんじゃないですかっ！」

先行き不安なのは理解していたが、さすがにこれはあんまりだ。

思っていたいなかったところでのシモンの暴言に憤り、千花は瞳に涙を溜めて怒鳴った。

握った両手の拳が怒りのあまりぶるぶると震える。

暴力はいけないと分かっているが、すごく殴りたい。

弟子が弟子なら師匠も師匠だ。

「ティカ、気持ちは分かるけれど落ち着いて」

エドアルドが千花を宥めるように言うが、あまり効果はなかったようだ。

「だって、だって、だって！ 異世界召喚なんてされたおかげでわたしの人生、滅茶苦茶じゃないですかっ！ シモンさん、そんなこと言うならすぐに家に帰してくださいよ！」

言ってみれば、千花は被害者だ。

間接的ではあるがその加害者のシモンがよりによって、元の世界でうまくやっていけないとは、思っただけでも絶対に言っただけじゃない言葉だ。

「ティカ、うるさい黙れ」

カイルがかつたるそうに手を振ると、千花は途端にしゃべれなくなっただ。

「……………！！」

千花がなにごとか叫ぼうとして口をパクパクさせる。
やがてなにを主張しようとする無駄と悟った千花の瞳からぼろぼろと
涙がこぼれ落ちた。

「ああ、ティカ泣かないで」

エドアルドがティカの頬に流れる涙を指で拭った。

「第二王子、ティカに勝手に触れるな」

カイルがエドアルドから無理矢理千花を抱き抱えるようにして奪
う。

「……………へえ」

エドアルドは瞳を見開いた後、面白そうに笑った。カイルは一瞬
それを鬱陶しそうにして見たが、すぐにシモンに向き合ってしまった。
「師匠、ティカは俺の弟子だ。それを魔術師団に勝手に入団させる
ことは俺が許さない」

「しかし、飛び抜けた才能があるのに士官させないとは宝の持ち腐
れだぞ」

「くだい」

カイルは有無を言わせない口調で、シモンを黙らせる。

「カイルは余程ティカが気に入っていると見えるな。君のそれは独占
欲かい？ 確かに彼女は毛色が変わっているが」

エドアルドがそう言って上から下まで値踏みするように見たので、
ティカは落ち着かなかった。

「そつだ、今日の晚餐はこちらで取っていくといい。ティカには今
からその支度をしてもらおうか」

「……………晚餐は口実で、ティカに装わせることが目的だろう。晚餐だ
けならこの格好で問題ないはずだ」

エドアルドの提案に、カイルが不機嫌そうに眉に皺を寄せる。

「まあ、そつだが。わたしもティカがどんな女性なのか興味がある
んだよ。……………そうそう、ティカの沈黙魔法はもう解いてくれるかな」

エドアルドは笑って言うと、侍女を呼びだした。

魔法が解除されたことで、ようやく話せるようになった千花はほっと息をつく。

「ちよっと、無闇に人に魔法なんてかけないでよね」

千花がカイルに文句を付けたら、彼は肩を竦めた。

「激昂する人間にはあれくらいがちよっどいい。おまえ、王子に『だつて』と何度も言っていたぞ」

そう言われてみれば、言ったような気がする。

千花はうっとうまると、不敬だったかとエドアルドをちらりと窺った。

「わたしなら、全く気にしてないよ、大丈夫」

「……すみません」

エドアルドには幸い笑顔で返されたが、怒りのあまり身分の高い王子にまで八つ当たりしてしまった千花は己の未熟さに身が竦む思っていた。

「お呼びでございますか？」

茶がかつた金髪に緑の瞳の落ち着いた感じの侍女が扉を叩いて現れる。

「ああ、セルマ。彼女はティカと言って、今度カイルの弟子になった娘なんだが、彼女に晚餐会の支度をしてほしいんだ。それもとびきりのやつをね」

エドアルドがそう言うと、セルマと呼ばれた侍女は驚いたように瞳を見開いた。

「まあ、カイル様の」

カイルのエドアルドへの口調といい、割と身分の高そうな侍女が見せる敬うような態度といい、カイルはひよっとしたら結構身分が高い人物なのかもしれないな、と千花はぼんやり思った。

「それではティカ様、こちらへ」

「は、はい」

セルマに別室の客間へ案内されて、千花はまず湯殿に連れて行か

れた。

一応王宮に来る前に風呂には入っていたのだが、問答無用で数名の侍女達に服を剥かれた。

「あああああのっ」

羞恥も手伝って、千花が戸惑いの声を上げる。

「ご心配されなくても、最高のお支度をさせていただきますわ、テイカ様」

いや、そういうことじゃないんですけど……。

侍女達に髪や体を念入りに洗われ、千花は半ば諦めの境地にいた。「それにしても、滑らかできめの細かい肌ですわね。お体も細くていられるのに、出るところは出ておられて素晴らしいですわ」

「はあ……どうも」

侍女達の褒め言葉につい気の抜けたな返事をしてしまう千花だが、その間も侍女達は爪を磨いたりして忙しい。

全身をタオルで拭かれ、ようやく湯殿から出たと思ったら、今度は台に寝かされ、いい匂いのする香油を全身に擦り込まれた。

全身マッサージを受けて千花がウトウトしかけたところに、セルマが声をかけた。

「テイカ様、それではお支度をしますので、ご移動をお願いいたしますわ」

「は、はい」

いけない、いけない。

あまりの気持ちよさに危うく熟睡するところだったよ。

千花は慌てて台から起きあがると、湯上がり用の薄い衣装を着せられて、衣装部屋へと移動させられた。

衣装部屋では侍女の間で、千花には何色が似合うか少し議論になった後、結局爽やかな色合いの淡い緑のドレスが選ばれた。そのドレスは爽やかさとふんわりとした柔らかさが絶妙で、こういう物が全く分からない千花にもかなりの一品だと分かった。

下着や靴はすべて繊細なデザインのものに取り替えられ、侍女達

が千花にそれを着せていく。

あー……、お姫様ってこんな感じなのかな。支度のたびに毎回こんなことあるなんて大変そう。

自分はお姫様でなくてよかった、と安心しながら千花は目の前に置いてある全身を映す鏡をじっと見ていた。

背中の中程までの真っ直ぐな黒髪は丁寧に梳られ、艶やかだ。横の短めの髪を残して、サイドをドレスと同じ色の細いリボンで編み込んで飾り、髪型は完成のようだ。

仕上げに化粧を施された途端、幼い自分の顔が一変に大人っぽくなったので、千花は驚いた。

「まあ、なんてお化粧が映える方なんでしょう。とても美しいですわ」

「これなら、殿下もきつと満足されますわ」

侍女達が褒めるのも満更お世辞ではないようだ。千花は呆然としてその支度の出来映えを見ていた。

鏡の中の千花は、どこから見ても美しい異国の姫君だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177ba/>

魔法の国のティカ

2012年1月9日22時48分発行